

2018. 3. 1

現代俳句千葉

128号

巻頭エッセイ

句友「姉崎路子」

企画部長 細野一敏



彼女との初めての出会いは平成十九年十二月十五日の現代俳句協会のネット吟行会でした。彼女はIT部員として本部の手伝いをしていました。この時の私の句

よいこらしよどっこいしよ冬囲い 一敏

が副会長であった村井和一さんの特選を頂き、写真俳句に凝りブログをやっていましたので、ブログを通しメールを交換するようになりました。手厳しく、そして優しく俳句の話題で盛り上がりつつ行きました。その頃彼女は看護師として働き、結社「鵬座」で大活躍でした。

平成二十一年には句集「路子」を上梓。看護師時代の生き生きとした句が心を打ちました。

列島みな猛暑赤子の爪薄し
秋袴ぼつぼつ縫いて癌患者

路子

夜の枢ナース机のスイトピー
逆縁を看取りし帰路の雨蛙
日向ぼこ延命院に尻向けて
二年位たつた頃だろうか、彼女に肺癌と骨移転あり：余命一年と。それでも彼女は気丈でした。この頃には電話のやり取りもたまにありました。平成二十三年安定期に入られたかに見えグループホームに入居したと連絡あり、新座市のグループホームをいきなり訪問しました。彼女のびっくりした顔とうれしそうな顔が今でも忘れられません。直接顔を合わせての会話は初めてでした。あつという間の二時間でした。そしてその年の八月九日のメール「まあ楽しそう！一敏さんの写真も載せて下さいよ。(句の講評あり)どの句も良いですね、又たまたまメールしますね。あ！また足が痛くなった。またね。路子”
今まで一度も句を誉めてくれた事なかったのに！

平成二十三年九月二十日九時三十分逝去

合掌

目次

句友「姉崎路子」 細野一敏	1
諸家近詠	2~4
私の感銘句	5~8
津田沼研究句会報告	9
青葉研究句会報告	9~10
柏研究句会報告	10
新春ミニ吟行会	
早春の房総探訪	11
図書紹介	12
ひろば	12~13
会員・会友の近況	13
新会員・会友紹介 掲示板	14

千葉県現代俳句協会会報

諸家近歌

山崎 政江

雛の夜は雛の顔して出てゆかん
卓に葡萄神の怒りの続く海
花野来て呼ばれたように齡をとる
流浪とは西日に晒す細き喉
蓮にまだ枯れる勢い摩天楼

山中とみ子

満天の星に落ち着く刈田かな
愚痴一つまあるく抱いて夜の桃
落葉おちば夕日の中の吹きだまり
秋蝶に息を合わせて塚廻る
誰にでも一つの取得草は実に

山中 頼子

汗の衣脱いで羽化するおとこかな
噴水や宙にふれては華と散る
水の私語盗聴しました熱帯魚
夏蝶と花との会話盗み聞く
戦なき世を慈しみ帰り花

岩岡 方子

天空へ続く棚田に月の雨
仁王立ちの原子炉直視秋の雷
鯛雲有明海を回遊す
天窓に木の実ことりと闇へ韻
コスモスの背後は虚空窓も無い

をがはまなぶ

水鉄砲頭よき子を狙ひ打ち
秋灯に順番のある家並かな
外に出るや秋の夕べに驚きぬ
新涼やばかんとジャムの蓋開ける
休暇明教師散髪して来たり

池田 博臣

触覚のうごめいている春の昼
晩節の指のささくれ罌粟坊主
炎昼や真つ赤なメト口水の上
高みより水の東京秋灯し
秋入日鉄橋に銀五つ六つ

吉岡 一三

穴惑い湿る豎穴住居跡
コベルニクスの廻した地球けむり茸
吾亦紅言葉にすればありがとう
肺へ落つ木の葉もあらん核日和
いちよう落葉横断歩道に縞馬臥し

岩崎 令子

水無月の紫の中歩きけり
老犬の傷舐めている春の昼
土手に菜の花空つぼの乳母車
楼閣の門より駱駝春疾風
葛切りや話の分かる男にて

秋山 勝男

デイサーピス待つ人赤い羽根胸に
風船葛揺れを楽しむ余生かな
宿題に童子の愚痴やすいつちよん
国難とは言わぬ借金霧深む
木の実降るとんびが鷹を生む話

橋口 久子

母の日や黙って花の置かれおり
思い出を背負いし一本桜かな
妊りて日傘小さくなりにけり
病室の窓に切り取る紅葉山
秋霖や母から手紙また届く

井上きよ美

実は風逃げているなり春一番
担がれて出てはみたもの羽抜鶏
青柿の落ちては遠くなる記憶
鯛雲歩けるうちは靴を買う
山頂は地球の突起秋の天

岩佐 久

あいうえおさくらさくころ戻ります
夏の月五百羅漢を照らしけり
日輪のまっすぐすすむ文化の日
蒼然とやがて騒然牡丹雪
人の顔とろりとろけて夜半の冬

山菅 恵子

鉄塔を囲みてたわなに柿実る
秋深ししみわたりたる子らの歌
友からの電話傘打つ雨の音
点滴の落つる音聞く秋病棟
長雨に乾かぬ服を眺めをり

安斎謙太郎

機関車を去りし黒猫西日中
父の日の夕日の中の五円玉
夏大根かつぐ七人の敵の中
真実を語ることなしとこてん
前世より来たる芋虫毒を浴ぶ

石井 稔

酢飯切るしやもじの捌き夏祭
お互いを屋号で呼んで盆見舞
捨つる物多い東京鯛雲
恋歌の破調のしらべ鶏頭花
紐一本だけの手品師秋うらら

諸家近歌

石崎多寿子

逝く秋の舟描かれて江戸切子
てつせんに搦めとられてみたまかな
三輪山に秋声しのび入ることし
秋の声聞き入ることし技芸天
うまづらはぎ買うて楸邨おもひをり

横須賀洋子

冬瓜をすつぱり抱いて考える
まだ続く晩年秋は気まぐれ
水無月の膝から下はわからず屋
この頃は踊り場にいる陽炎
木の芽風まだ骨風と呼ぶべきか

川嶋悦子

泳いでも漕いでも月光の芒原
黄落の街窓際の一人席
城陥ちてドラマが終る十二月
陽炎を詰め寅さんの旅靴
水温む桃色に埋め予定表

北野耕兵

山眠るいつかひとりになる時間
幼児の甘い握力花の客
朴の花いつかそのまま雲になる
風薫るべこの放尿水けむり
芋の露あてなく走るそれが好き

遠藤寛子

独楽の紐巻くに戸惑う小さき手
年頭のなかなか開かぬ貯金箱
各々のエコバッグには破魔矢かな
ひざ小僧力のこもる歌留多とり
書初紙の書き誤ってひれ伏す子

大見充子

ゆくりなく獣の覗く春の部屋
天国が近し朝の蜷汁うまし
音高く花の散る夜キリンの死
遙かなる族おもえば蛍かな
好日の眠きふりしてかたつむり

楠井収

夕焼けて子を許す時宜探るかな
黙考の西郷どんや山眠る
秋出水嘘を見透かす妻の顔
ぼつねんと赤き手袋拉致の浜
角栄のよっしゃよっしゃや天狗茸

小野功

十六夜に男の素顔見えてくる
身の内の火種は絶えず冬椿
数学を解ければ逢えるベガサス座
軍靴の近づいてくる去年今年
終の道惑うことなき寒北斗

菊池和子

病棟のカーテン軽く日脚伸ぶ
初夏のふくらむ水を掬いけり
チングルマ池塘は青い空を抱き
ステテコのままの晩年ピアノ弾く
草もみじ素直なままの終の色

加納ひでこ

きさらぎのピアノなにげに白い足
荒星にゆだね漫ろゆくはナイーブ
木漏れ日の道ふうつと此処まで来たね
降りみ降らずみの雨ほんのり虹が
終活の色合いなれば足袋の白

加倉井允子

妣の杖手頃となりぬ師走の灯
雨だれの怠きボサノバ夜の秋
白椿明日を思えば落ちきれず
蛸蚪に足ラストダンスの靴がない
「イマジン」を聞きたくないか山椒魚

岡田春人

何となく五体満足初湯かな
春野を歩くさびしがるてのひらと
白鷺の孤独を好む青田かな
十五夜の竹のなからパンダ生れ
腸に気合いだ気合い寒の水

蛭名節昌

冬の雷片目の睨む割れ鏡
カレーの匂う街広角に冬夕べ
時を移して凍蝶の向き変わる
鯉濃を啜り遠見に眠る山
冬の海何処へ渡る船尾灯

興津恭子

踏み入って冬の息満つ杉木立
矯められて月の松とや涅槃西風
冷房車背正しても譲られる
北へ向く道の深さよ花薄
瓶を出て帆船船出する臚

片岡秀樹

ピーカーの中の結晶初明り
凧上り影との距離を抜けけり
風呂敷という知恵袋福寿草
初仕事まず一本のチョーク折る
代役の演技に長蛇冬薔薇

諸家近詠

外灯に照らされ枯葉濃く黄色
寒月の光と共に家に入る
除夜の鐘八十聞いてふりむかず
師走かな事件追いかけて記者走る
お雑煮はいくらを乗せて母の味

太田 涼子

まだ鶏になれず夕日の鶏頭花
煙突はひとりものです急に秋
駅弁のふたを開ければ大花野
北斎や両国橋に葱下げて
りんご囁む宇宙はまるいものばかり

岡田 淑子

会っておきたい男が二人夏百日
万緑の奥へ奥へと返信す
家中のどの抽出にも残暑
鎮魂の海を剥がして秋怒濤
晩年の入り口らしいので熱爛

小野富美子

生きる時間等分ではなし雪しんしん
洗い浚い白状裸木小気味よく
難問を解きてほぐるる冬薔薇
さざ波の寄する岸辺や去年今年
花散るやどうでもいい過去すてちまお

大澤 重市

独りではなかつた初夢のワイキキ
風葬の手続き蝶の列にいる
淋しいかと問われて蝶といる耽美
娼婦ソーニヤどうなりと更衣
絶景の秋思はんぶんポルトガル

菊地 京子

庭花火闇に影あり匂ひあり
ユツカ咲く野鳥保護区へ迷ひ込み
西瓜割り鉄腕アトムは瞬かず
推敲のための音読夜の長し
桐の実のとんで推敲不足の匂

片岡伊つ美

風光る今が幸せカブチーノ
姿よき秋刀魚のやうに寝てみたる
白梅の匂ふ昭和の定食屋
囀りや岸にふくらむ水明り
原子炉の見ゆるところに桜咲く

川又 優

如月のあかい街から帰りけり
群衆の端っこにいて火神鳴
抜け道はたしかにありて昭和の日
戦争のない八月を赤ん坊
恋猫跳んで少女のように笑う

小川トシ子

面売りの面立てて売る花ぐもり
さくら草仲良きこともくたびれる
かと言つて無下には出来ず青大将
シクラメン男の靴は海へ向く
もう何も言うことの無き冬木立

加藤 法子

春耕のしつかと大地輝かす
胸中に滾る川あり昼螢
落ち口に雲の寄り来る秋の滝
水仙の芽の敷き詰めて待つ朝日
俎板に縦横の傷切山椒

金子 敏

春を呼ぶ幼き子らの手話ソング
行く春やみぞおちに染む瞽女の三味
化粧塩振る夫の指鮎はねる
梵鐘に法要中と石路の花
珈琲の香より足音師走来る

岡山 敦子

冬めくとおもう遠くの工事音
花札の裏に月光潜みおり
冬麗の少し酸っぱい赤ん坊
秋霖のときどき獣臭きかな
曼珠沙華だれかに水をもらいおり

楠見 恵子

反射とはたんぼぼ見れば出る笑顔
黴にほふ自慢話の墓誌に無く
霧の中ゐるのは君か吾なのか
公平と云ふが怪しき栗ごはん
積読はそのまゝにして年用意

大坂 吉也

森の教室木槌にとまる黒揚羽
草を刈る草に刈られる煩惱や
秋出水尽くせぬ想い再発す
夜気みちて魔がさす言葉十二月
後悔やぐおんぐおんとオートバイ

尾形ゆきお

マグネットの並ぶボードや万愚節
漉桁をさばく水薬ゆるる
炎天や歩くカラスとすれ違ふ
行列のパン屋の匂ひ夕立あと
月天心眼底検査白光す

岡崎 翠

春を呼ぶ幼き子らの手話ソング
行く春やみぞおちに染む瞽女の三味
化粧塩振る夫の指鮎はねる
梵鐘に法要中と石路の花
珈琲の香より足音師走来る

私の感銘句

大見 充子

作者名 号頁

まどろみの貝よりうまれ望の月 鈴木 肇子 124 4
 石ころを踏み短日のふくらはぎ 山口 彩子 126 4
 身のうちのどこに触れても冬の川 山口 彩子 126 4
 何を語るか終戦の日の白い靴 田村 隆雄 126 4
 自己嫌悪蜜袋に寝るといい 宮川登美子 127 4
 少しづつ忘れゆくなり鴉高音 山崎 幸子 127 5
 ともだちのともだちおうい牛蛙 山崎 聰 127 5
 追伸を書こうよ虹の消えぬ間に 青木 一夫 127 6
 病院に母捨ててくる花満開 東 國人 127 6
 小春日和ひらと泣く新生児 石井紀美子 127 6
 病院に母捨ててくる花満開 東 國人
 お母さんが入院されたのであろうか、捨ててくる“にその心痛が滲む。“花満開”がさらに寂しく、悲しく、辛くしてくれる。しかし句としてはカラツとしていて、その巧みに感服。

久保 筑峯

加齢ふと眠つてばかりいる金魚 田口満代子 124 3
 柞紅葉まとい鬼の子秩父の子 高木 一恵 124 4
 敗残兵兜太「アベ政治を許さない」 並木 邑人 125 8
 遺骨なき墓に無念の曼珠沙華 松本 静顕 126 4
 きな臭き昭和の軋み雁来紅 山崎 幸子 127 5
 白菜を割れば踊る観世音 井上けい子 127 5
 生も死も一朝の夢月のぼる 飯島 昭子 127 5
 裸婦像の緑に光る乳房かな 市川ふみを 127 5
 曼珠沙華台座の傾ぐ野の仏 渡邊 竹庵 127 6
 夕焼をはがいじめする純老女 山中 葛子 127 6

敗残兵兜太「アベ政治を許さない」 並木 邑人

作家で「九条の会」呼びかけ人の澤地久枝が発案した、安倍晋三内閣の政治を批判する文言。俳人金子兜太が揮毫し、二〇一五年の安全保障関連法案を巡る各地のデモでポスターとして掲げられた。これにより、同年「ユークアン新語・流行語大賞」のトップ10に選出された。金子兜太氏は終戦をトラック島で迎えた。多数の餓死者と戦死者を出し、隊長としての責任を感じ、敗残兵としての金子兜太氏は、一貫して反戦の旗手として、一〇〇歳の今日まで、「存在者」として元気に頑張つて居られる。

保坂 末子

石焼芋しずしず通る松濤町 檜垣 栞樓 125 9
 雑音の中に昭和史ひびり落つ 三苦 知夫 126 2
 羽後鶏初めの一步踏みだせず 星野 一恵 126 4
 父の日の庭石一つずらしけり 松沢 貞津 127 4
 咎ひとつ遠き花野に埋めて来し 井上けい子 127 5
 白靴のできること夕餉に帰ること 渡辺 澄 127 5
 葱坊主わつさわつさと子育て中 伊ザル真央 127 6
 追伸を書こうよ虹の消えぬ間に 青木 一夫 127 6
 胡桃割る鬮うことは溢れさせ 市川 唯子 127 6
 ゆうやけを掃き寄せている部活の子 石井紀美子 127 6

栃木 きよ

虚ろなる風のかたちの蛇の衣 長井 寛 127 4
 揺り椅子の弓より生まる秋の紅 長井 寛 127 4
 咎ひとつ遠き花野に埋めて来し 井上けい子 127 5
 立秋やカフカいよいよ手に重し 伊藤 希眸 127 5
 葱坊主わつさわつさと子育て中 伊ザル真央 127 6
 子規の忌やたつぷりと張る風呂の水 青木 一夫 127 6

青木 一夫

若くないけど行つて見ようか春のユニクロ 小林 雪枝 124 2
 加齢ふと眠つてばかりいる金魚 田口満代子 124 3
 片蔭は癒えゆく母の渚です 高野 礼子 124 4
 陽炎の中からひとり出てこない 直江 裕子 125 9
 修正のきかぬ自画像野火走る 富澤さち子 125 10
 よく育つ三年二組のヒヤシンス 松本 千花 126 2
 初空の落款として梅一輪 中山 皓雪 126 2
 散骨の海果てしなく冬銀河 井上けい子 127 5
 葱坊主わつさわつさと子育て中 伊ザル真央 127 6
 薔薇の夜罪の匂いのふとしたり 石井紀美子 127 6
 若くないけど行つて見ようか春のユニクロ 小林 雪枝

菊地 京子

春の噴水設定いつそのこと女神 杉山真佐子 124 3
 風花となるみずいろの俳文学 木之下みゆき 124 4
 今日草萌え星空へ書き送る 荒木 洋子 125 8
 猫柳辛いバスタと喧騒と 半田 千枝 126 2
 落葉踏む残り時間は気に掛けず 三好美穂子 126 4
 雨蛙青いセダンに乗り込みぬ 柳本 ゆみ 126 4

人形の手が伸び拾う落し文 藤田 守啓 126 4
 朝顔の蔓の行方は夢の中 山崎 幸子 127 5
 草に手を切られて八月の自覚 市川 唯子 127 6
 桜に到着めちやくちや雨おんな 山中 葛子 127 6

岡崎 翠

向日葵の種のひしめく中の鬱 千葉 信子 124 2
 疑うは鬼になること豆を撒く 高桑婦美子 124 4
 目玉まで青くなりそうソーダ水 永井 奈々 125 9
 修正のきかぬ自画像野火走る 富澤さち子 125 10
 夕虹の消えてふる里遠くなり 森 孝子 126 2
 どこまでも歩きたくなる芒原 柳沢 純 126 3
 大花火流れて月の残さるる 福田志津子 126 3
 底冷えやミサイル通過したらしい 青木 一夫 127 6
 病院に母捨ててくる花満開 東 國人 127 6
 葱坊主わっさわっさと子育て中 イザベル真央 127 6
 葱坊主わっさわっさと子育て中 イザベル真央

簡潔でリズム感が良い。子育てを心から楽しんでる。自然体の葱坊主の畑一まいが浮かび一人っ子ではなく、わっさわっさという措辞が子沢山を思わせる。母と子の話し声まで聞こえてくる。

風に向かって音の出そうな葱坊主が子供のように見えて…子育ては大変ですが一番楽しい時間であった事を思い出させてくれる好きな句である。

椎名 鳳人

雑音の中に昭和史ひばり落つ 三苦 知夫 126 2
 世に条理不条理のあり実梅落つ 実初 繁 126 2
 籍ぬけば抜いたで騒ぐ竹の秋 保坂 末子 126 3

進退は男の器量冬の鵞 柳沢 純 126 3
 国境を持たぬ燕の飛翔力 松下總一郎 126 4
 熱帯夜阿修羅のごとく迎え打つ 宮川登美子 127 4
 虚ろなる風のかたちの蛇の衣 長井 寛 127 4
 螢火とゆつくり呼吸合ってくる 森 章 127 4
 散骨の海果てしなく冬銀河 井上けい子 127 5
 原爆忌人間困った動物だ 吉野 精 127 5
 進退は男の器量冬の鵞 柳沢 純

国技である大相撲界における最近の失態は目を覆うばかりで、その決着は年越しとなったが今後に残ったしこりは簡単に消えるものではないであろう。

一方、最近ことに目立つのが大企業におけるトップの謝罪である。この世の中に詫びて済むことなど何一つない筈であり、あまりにも情けない。両者とも組織の頂点に立つ人の姿勢そのものが問われている。再発防止への根性を見せてほしいと鵞の声が人びとを代弁している。

小野 功

鶯飛んでもつとも神に近き夏 久野 康子 124 2
 麦秋の軽石ほどの反抗期 寺田美津江 125 8
 春の風やさしく抱かれしその昔 鳴戸 奈菜 125 9
 さくらさくら筆庄美しき梵字かな 林 ゆみ 125 9
 自己主張強くて孤独白つばき 三苦 知夫 126 2
 故郷のふるさとというの青田風 細根 栞 126 4
 在原業平に似る青蜥蜴 長井 寛 127 4
 逢ふときは白いドレスを花辛夷 井上けい子 127 5
 ひとりならついでおいでよひきがえる 山崎 聰 127 5
 夕焼をはがいじめする純老女 山中 葛子 127 6

檜垣 栢樓

さるすべり風の裏側見てもう 三須 民恵 127 4
 東浪見駅の前にとらねこ冬日向 三宅たくみ 127 4
 彩雲やつくつく法師いまや急 相原 一枝 127 4
 吉宗の話などして桜餅 浅野 天一 127 4
 梅満開副住職に嫁御来る 前田 孝子 127 5
 蟬時雨バンドネオンは膝で弾く 市川ふみを 127 5
 よく見れば犬ふぐりなり私なり 浅野 文子 127 6
 ポケットの飴に手がゆく花ぐもり 内田 庵茂 127 6
 エラーとは機械の言葉冬嫌い 山崎 公子 127 6
 好物の富有柿供ふ元氣です 伊東 靖子 127 6
 東浪見駅の前にとらねこ冬日向 三宅たくみ

東浪見は「とらみ」と読む。「太平洋の波浪を望む地」というのが原意だが、古くは太平洋を「虎海」と呼んだのかも知れぬ。その「とらみ駅」前に冬の陽を浴びて一匹の「とらねこ」が悠然と寝っ転がっている。和猫には白猫、黒猫、さび猫、とらねこ等六種があるが、「とらみ駅」には断然「とらねこ」が合う。因みに東浪見駅は長生郡一宮町にある外房線の無人駅である。電報略号は「トラ」。最近まで駅舎は貨車を改造したものであった。

馬淵 津枝

出る釘になれず叩かれ蛇穴へ 鈴木まんぼう 124 3
 風花やかなしき骨の相寄れる 高木 一恵 124 4
 紅椿負けられません負けません 坂本千恵子 125 8
 見えないものに押され春愁の転びぐせ 普川 洋 125 8
 雲の峰黙は女の挑戦状 長濱 聰子 125 10
 海よりの風を商う風鈴屋 森 孝子 126 2
 昭和の日昭和をけずる乾物屋 矢野 忠男 126 3

干されれば笑うしかない目刺かな
 日日草裏も表もない生活
 奔流となりし加齢や初日記

関谷ひろ子

一刀で秋を刻みし木版画
 素粒子の子細は知らず文化の日
 霜月をこじ開けて来る赤ん坊
 陽炎の中からひとり出てこない
 道祖神面差しゆるむ梅雨晴間
 干されれば笑うしかない目刺かな
 万緑に紛れてからは第三者
 秋声や角を曲れば暮れてをり
 ともだちのともだちおうい牛蛙
 心にも傾きのあり堅香子の花

倉岡 けい

炉明りの民話あべかわ餅二つ
 独白めいて花過ぎの移転先
 八月の遠い出口を白い象
 春の風やさしく抱かれしその昔
 亀鳴くやお袋という無限大
 山彦の手応え青嶺ぐんと寄る
 籍ぬけば抜いたで騒ぐ竹の秋
 踏み出すか雲の峰まで乗車券
 何を語るか終戦の日の白い靴
 草に手を切られて八月の自覚

細野 一敏

吊り草はひとりにひとつ終戦忌

保坂 末子	126	3	保坂 ミエ子	127	4
三須 民恵	127	4	田村 麗	125	8
保坂ミエ子	127	4	田端 重彦	125	8
			並木 邑人	125	8
			直江 裕子	125	9
			日野 葉子	125	10
			保坂 末子	126	3
			村上千代美	126	3
			飯島 昭子	127	5
			山崎 聰	127	5
			井上けい子	127	5
			小林 俊子	124	2
			杉山真佐子	124	3
			徳吉洋二郎	124	3
			鳴戸 奈菜	125	9
			長濱 聰子	125	10
			実籾 繁	126	2
			保坂 末子	126	3
			村上千代美	126	3
			田村 隆雄	126	4
			市川 唯子	127	6
			徳吉洋二郎	124	3

霜月をこじ開けて来る赤ん坊
 雲の峰黙は女の挑戦状
 自己主張強くて孤独白つばき
 春大根新妻という忘れもの
 青嵐女兵士の腰に銃
 血液さらさら炎天のぐらぐら
 きな臭き昭和の軋み雁来紅
 しんじゅくで別れてからの雪の山
 薔薇の夜罪の匂いのふとしたり
 しんじゅくで別れてからの雪の山

福田志津子

海よりの風を商う風鈴屋
 干されれば笑うしかない目刺かな
 今生の余熱で挑む寒詣で
 羽抜鶏初めの一步踏みだせず
 熱帯夜阿修羅のごとく迎え打つ
 炎昼の表情筋から壊れだす
 原爆忌人間困った動物だ
 ふるさとの名もなき山の風涼し
 十三夜潮ひたひたと航を曳く

昭和三十年後半の駅のホームには登山姿の若者
 達が通路に座り込み、最終夜行列車を待つていた。
 現代の登山装備とは違い、かなり貧相であるが
 どの眼にも明るい輝きが漲っていたものである。
 あのアルプスの雪嶺、山岳部の仲間達との絆。
 あれから早五十年当時の仲間達とは年賀状だけの行き来となつて
 いる。傷だらけになつた古い山靴を磨きながら懐かしく
 思い出させて頂いている。

並木 邑人	125	8	山崎 聰	127	5
長濱 聰子	125	10	石井紀美子	127	6
三苦 知夫	126	2			
馬淵 津枝	126	2			
柳本 ゆみ	126	4			
細根 栗	126	4			
山崎 幸子	127	5			
山崎 聰	127	5			
上野 紫泉	127	6			
飯島 昭子	127	5			
吉野 精	127	5			
森須 蘭	127	4			
宮川登美子	127	4			
星野 一恵	126	4			
三好美穂子	126	4			
保坂 末子	126	3			
森 孝子	126	2			

被災地に苦界満ちるて麦芽ぐむ
 すぐ乾く汗のTシャツ敗戦忌
 夏が来る水平線を引き直し
 使ひ捨て懐炉貼る主義貼らぬ主義
 陽炎の中からひとり出てこない
 ポケットに田辺聖子と空蟬と
 うまごやし冠にも紐にもなれる
 転倒のわが身を啼くや鴉の子
 人体は血管だらけ秋暑し
 ゆうやけを掃き寄せている部活の子
 日もすがら素つびんでる野分あと
 人体は血管だらけ秋暑し

千葉 信子

北朝鮮ロケットのニュースが世界を駆け回っている。
 宇宙に行くのに、百キロの距離だから十分ほど。
 米国まで小一時間で到着すると息巻いている。
 ところで掲句だが「人体の血管」の長さは地球二周半になるといふ。
 十万里キロを僅か一分で一周する。
 眠つても歩く時も十万里キロを一分である。
 ロケットの比ではない。
 はいえ大陸間弾道ミサイルのニュースが九月から繰り返されると(違う意味で)秋暑しの季語に領いたりする。

石段の一段ずつの蟬時雨
 問答は要らぬ新米卵かけ
 卵の花やみ仏そつとまなこ開け
 梅満開副住職に嫁御来る
 老いしこやんわりと告げ冷し酒

池田 和人	127	6	高橋 健文	124	3
			徳吉洋二郎	124	3
			津高里永子	124	4
			直江 裕子	125	9
			永井 奈々	125	9
			森村 文子	126	2
			山口 夕紀	126	4
			内田 庵茂	127	6
			石井紀美子	127	6
			阿部さくら	127	10
			内田 庵茂	127	6
			森 章	127	4
			三浦 侃	127	4
			浅野 天一	127	4
			前田 孝子	127	5
			新井 秋芳	127	5

糸瓜揺れ明日のことは風のまま 飯島 昭子 127 5
 相続で売られし林青葉木菟 内田 庵茂 127 6
 われも昔ネオリアリズム泥鰌かな 山中 葛子 127 6
 宇治金時「小」を樂しむ齡ひかな 伊東 靖子 127 6
 赤い羽根胸に立飲み女去る 浦野 五郎 127 6
 卯の花やみ仏そつとまなこ開け 浅野 天一

御仏は眼を閉じておられるようでも、ちゃんと御覧になっておられる。それなのに、わざわざ御眼を開いて御覧になろうというのである。路傍の石仏にもたれかかるようにして咲く梅花うつぎでもあろうか。かすかな香り、涼風に揺れるさわさわという葉擦れの音……。それらを確りと御覧になろうとしておられるのか。それとも、花を愛でている路傍の衆生に御眼を見開いて、慈悲を垂れ賜おうとしておられるのか……。

松澤 仲佳

菜の花に聞いてみたいが間に合わず 白木 暢子 124 2
 遠吠えを角出して聞くかたつむり 小多田文子 124 2
 冬蝶のごと娘が迷ふ志望校 鈴木 房州 124 4
 霜月をこじ開けて来る赤ん坊 並木 邑人 125 8
 囀りを聞き分けているパンの耳 直江 裕子 125 9
 若布採りなかにピアスの子が一人 馬場 馬子 125 10
 ニコライ堂ロシアの子等も七五三 安田 時空 126 3
 良き昭和たとへば母の豆御飯 松本 静頭 126 4
 八月は誰か二階にいるような 山口 彩子 126 4
 くちびるの退化はじまる秋の風 イザベル真央 127 6

加納ひでこ
 みちのくの沈みきれない紙の雛 高木 一恵 124 4
 浮浪雲引き寄せ安房の初時雨 水戸 吐玉 127 4

色づかぬうちは紛れて烏瓜 森 章 127 4
 父の日の庭石一つずらしけり 松沢 貞津 127 4
 声たてず青大将とすれちがう 秋谷 菊野 127 4
 銀やんま石棺の縁噛みいたる 宇佐見房司 127 5
 梅雨長し星の缶詰開けようか 吉野 精 127 5
 ともだちのともだちおうい牛蛙 山崎 聰 127 5
 底冷えやミサイル通過したらしい 青木 一夫 127 6
 その日まで踏ん張つてみる西行忌 池田 和人 127 6
 声たてず青大将とすれちがう 秋谷 菊野
 歳末、新年の慌しさにこの句を再読いたしまして、ほっこり救われました。感謝です。

たけなか華那

蟻地獄ばた餅寺へ八つほど 鈴木まんぼう 124 3
 鳳仙花はじけて水位観測所 高橋 健文 124 3
 吊橋を猪来るよくよくの夜であり 武田 伸一 125 8
 湯豆腐の角がぐらりとぶつかる夜 田村 麗 125 8
 ゆつたりと風通しけり犬ぶぐり 中澤 一紅 125 8
 路を煮る骨が空気を欲しがって 倉岡 けい 125 9
 WowWowWow不信なだと叫ぶ夏 松崎あきら 126 4
 眼鏡をはみ出してゐる鰯雲 秋葉 紅陽 127 6
 田を植えてつくづく今日を見ておりぬ 石井紀美子 127 6
 二百十日ゆつたり歩く盲導犬 浦野 五郎 127 6
 湯豆腐の角がぐらりとぶつかる夜 田村 麗

白い豆腐と夜。やわらかいものと角。はふはふ食べる湯豆腐は菜味もポン酢も時間も平安に見える。舌を焼く程の熱さ、鍋の中でふつつつ揺れる豆腐、この怖さはなんだろう。人である。人の心の「ぐらり」転換する動機に似ているのだ。それでも胃の腑におさまれば一日は終わる。湯豆腐という清潔でやさしい記憶になる。

杉山真佐子

一位の実甘し鳴咽の少年期 越野 雄治 124 2
 いつもの鍵がす現や狐火や 田口満代子 124 3
 八月の遠い出口を白い象 徳吉祥二郎 124 3
 除草剤除染剤麦は眠らない 高桑婦美子 124 4
 まだ哲学している手袋の片っ方 普川 洋 125 8
 缶詰めを空けるぶるつくる八月 馬淵 津枝 126 2
 国境を持たぬ燕の飛翔力 松下總一郎 126 4
 父の日の庭石一つずらしけり 松沢 貞津 127 4
 白菜を割れば顕る観世音 井上けい子 127 5
 田を植えてつくづく今日を見ておりぬ 石井紀美子 127 6

國分 三徳

木葉髪喋りまくって帰りけり 小林 雪枝 124 2
 アナログの蛇アナログの穴に入る 普川 洋 125 8
 海よりの風を商う風鈴屋 森 孝子 126 2
 凶書室の机にひとりづつ昼寝 前島きんや 126 3
 干されれば笑うしかない目刺かな 保坂 末子 126 3
 遺骨なき墓に無念の曼珠沙華 松本 静頭 126 4
 吉宗の話などして桜餅 浅野 天一 127 4
 風光るいつも列からはみだす子 秋谷 菊野 127 4
 原爆忌人間困った動物だ 吉野 精 127 5
 浮かぶ柚子沈めてはまた浮く平和 東 國人 127 6
 原爆忌人間困った動物だ 吉野 精

本当に困ったもんです。少々の智慧があるばかりに、地球上でこんなに争いばかり起こしている動物はいない。なんとかならないか。そんな切実な、なかば呆れ返っている気持がこの句です。お猿さん並の智慧でとどまっていれば、神様の掌の上で収まっているものが、人間はそこをばみ出て余りにも身勝手になってしまっています。

□□津田沼研究句会報告□□

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第三〇六回 平成二十九年十一月十四日

司会 イザベル真央

泣き言を並べる南瓜抱いてやる 佐藤 晏行
 秋の薔薇ふと弟のいないこと 白木 暢子
 美少女の蠅螂肢を舐めている 楠見 恵子
 この人がお母さんかもしれない雪が 松崎あきら
 初冬の灯どうだ一杯等さん 吉野 精
 勤労感謝の日ふるさと納税す 徳吉洋二郎
 めがねケースパチンと閉じる小六月 イザベル真央
 廃屋のざくろ人声に爆ぜてみせ なかもと淑子
 棕櫚折れた坂こななふううに11月 竹中 華那
 どの窓も布団が干され赤ん坊 岡田 淑子
 全体のミイラにピアス憂国忌 村上 澄子
 ゆく秋にそろりと告げる墓終い 横須賀洋子
 栗の菓子媼へ届く応援歌 股野 久子
 黄落の日毎に山を滑り落つ 大塚 弘毅
 消しゴムの空白ひとつ鱗雲 池田 博臣
 玄関に犬の寝そべりハロウィン 前島きんや
 洪水六寸死に損なうてきりぎりす 檜垣 梧樓
 末枯れて蔓のみ宇宙遊泳する 金子 未完
 一人居の温め直すおでん鍋 深山きんぎょ

●第三〇七回 平成二十九年十二月十二日

司会 徳吉洋二郎

社会鍋忍の一字が焦げている 徳吉洋二郎

生きている証あかぎれ舐めてみる 吉野 精
 むかご飯昔ばなしが食い違う なかもと淑子
 冬の虹さつちゃんまたねまた明日 横須賀洋子
 冬麗の少し酸っぱい赤ん坊 楠見 恵子

しあはせを買ふ列につく年の暮 深山きんぎょ
 散葉にむせぶ天皇誕生日 岡田 淑子
 冬にんじん在宅介護義理人情 白木 暢子
 永遠の時限爆弾十二月 池田 博臣

哀号と哭ける白骨冬日本海 檜垣 梧樓
 友が来る枯野に鬼の面つけて 小林 実
 クリスマス賛歌に遠くたぬき汁 佐藤 晏行
 年の瀬のパン屋にトング揺れている イザベル真央

単細胞になり切れぬ大氷柱 金子 未完
 流水来いわれなく虐げられしものたち 松崎あきら
 柘の花の匂ひへ宇宙人 前島きんや
 家鴨の一家饒舌クリスマス 村上 澄子
 細枝にのぼり蠅螂絶命す 大塚 弘毅

●第三〇八回 平成三十年一月九日

司会 池田 博臣

十二月便器も毀れゆくものか 小林 実
 一月や底のぬけたる紙袋 岡田 淑子
 着ぶくれて犬に論語と赤ちゃん語 横須賀洋子
 寒椿恋は腫瘍のごとくあり 楠見 恵子
 冬眠のヒトシ起きよと禽鳴けり 徳吉洋二郎
 空爆に一度も遭わず初詣 金子 未完
 花林糖齧ってひとり松の明け 池田 博臣
 三ヶ日マッソージ機に身をまかす 佐藤 晏行

七草粥あとはブレンドコーヒーを 吉野 精
 冬の深すぎるポケットだから希望 松崎あきら
 寒晴れや主なき家の鬼瓦 なかもと淑子
 戌年の遠吠え寒しU・S・A 檜垣 梧樓

句会の後、場所を変え大畑前会長の三回
 忌をワインで献杯して修した。

□□青葉研究句会報告□□

(於：千葉市民会館・第三会議室)

●第七十六回 平成二十九年十月二十六日

司会 鈴木まんぼう

村中の柿を点して逃散す 矢野 忠男
 点字本の真白月光あふれしむ 鈴木まんぼう
 キリストの泪のかたち黒葡萄 徳吉洋二郎
 ぜいたくな夜た蟋蟀が鳴いている 細根 栗
 ふれてより動悸はやまる秋桜 吉野 精
 木の実落つ生涯一度の冒険 馬淵 津枝
 為政者は産後の亀のごと唄る 並木 邑人
 行方不明二千十七年の秋 三須 民恵
 芒原前へ進メと誰も言わず 加藤 法子
 紅葉酒谷の深さには触れず 越野 雄治
 コスモスの花の下の雨もじゃもじゃ 竹中 華那
 夏至やがて勇者は塞く戦士は病む 松崎あきら
 まっさきに枯葉集まる陣屋跡 小林 実
 まゆみの実爆せて貴女はべっかんこ 細野 一敏
 蓑虫の消えて子どもは上を見ず 山崎 幸子
 天高し三百六十度の郷愁 長瀨 聰子

●十一月は現代俳句協会七十周年記念式典と同日となったため休会
●第七十七回 (平成二十九年十二月二十八日)

司会 石井紀美子

梟の入りこめない赤い闇 細根 葉
 寒月やどの蛸壺にも重力波 越野 雄治
 刻々と流水純愛があぶない 松崎あきら
 12月カピバラはビタミンEだ 竹中 華那
 真面なる暗闇地上は冬晴れ 三須 民恵
 冬茜酒のちらつく一六時 吉野 精
 酔い醒めの水分け合うもかまど猫 加藤 法子
 戦なるか白鳥の首立直す 鈴木まんぼう
 蟹歩きで席着く冬の赤ちようちん 細野 一敏
 くだんくたんに寝入る師走の終電車 石井紀美子
 お元日とうとうたらりとうたらり 矢野 忠男
 街裏で知り合つたばかり爛熱し 馬淵 津枝
 酒ありて人ありて今忘年会 山崎 幸子
 ブランディ紅茶に沈む寒落暉 長瀨 聰子
 十二月便器も毀れゆくものか 小林 実
 楊貴妃の拗ね声たてし鎌を研ぐ 並木 邑人
 源平の一炊の夢鱸の酒 徳吉洋二郎

●第七十八回 (平成三十年一月二十五日)

司会 松崎あきら

吹き零るる齋粥より東歌 越野 雄治
 寒卵こつんと座五の降臨す 長井 寛
 赤道越ゆ1月の吾裏返る 松崎あきら
 雪女郎と言えばすなわち岸恵子 小林 実
 「非常口」たしかめ亀の冬眠す 鈴木まんぼう
 この道がすき冬たんぼがついてくる 加藤 法子

宙に道海に春待つ架橋あり

白梅のひと枝活けよ我死す日

寒鴉道あやまりし漢あり

眼を濯ぐ寒夜の水にけもの臭

国生みの陰はイザナミ葦の角

恋猫とならず女に抱かれてる

にげんの性の寄り道小正月

道石のひそとありけりついに雪

草稿の余白に余寒うずくまる

ざわざわと雪頭の中に熊手

西郷どんやアイボに曳かれ恵方道

坂道小道転ぶなと日脚伸ぶ

遠筑波敷島の道恵方道

長瀨 聰子

細野 一敏

吉野 精

並木 邑人

細根 葉

馬淵 津枝

池田 博臣

竹中 華那

石井紀美子

三須 民恵

徳吉洋二郎

山崎 幸子

矢野 忠男

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー書店」2階)

●第六十六回 (平成二十九年十一月十一日)

司会 小林 俊子

のぼさんに取っておきたい柿ひとつ 木之下みゆき
 涙にはあらず秋霖の余波である 高橋 宗史
 焚火など出来ぬ世となり水を汲む 野口 京子
 行く秋や子等の消えたる小学校 井上けい子
 鶏頭やミラノ帰りのハグの癖 佐藤 鈴子
 石路の花一匙の毒したたらす 下村 洋子
 洛陽の辻堂巡りゆく時雨 小林 俊子
 大切な鞆かかへて日向ぼこ 岡田 春人
 北窓の隙間より入る天の邪鬼 長井 寛

●第六十七回 (平成二十九年十二月九日)

司会 高橋 宗史

冬晴や遠流の島へ渡る船

斜交いに株のテロップ見る師走

満目の紅葉の渦に投身せよ

どの道を行けど晩年花ヤツ手

夕聞仰ぐたましいいろの榎櫃の実

冬月へ口笛を吹く町はずれ

少年の雄叫び朝の枯木立

極月や獣の皮の鞆さるる

火の用心ドアのノブにもガーリック

寒波来る色気と狂気軋ませて

夕しぐれ馬小屋に馬帰りゆく

落葉踏み背後よりくる猿田彦

岡田 春人

松澤 龍一

井上けい子

小張 直子

佐藤 鈴子

伊藤 希眸

小林 俊子

下村 洋子

木之下みゆき

栃木 きよ

高橋 宗史

長井 寛

●第六十八回 (平成三十年一月十三日)

司会 高橋 宗史

文字を打つ地球の一角雪催

壁を叩いて初春の永久を招ぶ

だんまりの吾もゴリラも日向ぼこ

筑波山まで一枚の冬田かな

寒月のまろしわらべの顔の美し

クリムトの愛は直角初み空

自転車で来る隻腕の風水師

歳晩の買物に足すクロワッサン

たえまなく雪降る夜を透きとおる

千年の神杉を透く初日影

高橋 宗史

伊藤 希眸

小林 俊子

岡田 春人

長井 寛

栃木 きよ

松澤 龍一

佐藤 鈴子

下村 洋子

井上けい子

早春の房総探訪

日時 平成三十年二月二十八日(日)
 会場 上総一宮町 旧寿屋本家
 参加者 二十九名
 司会 徳吉洋二郎
 披露 星野一恵・高橋宗史



例年にない厳寒の候、上総一ノ宮駅前九時四十分集合、千葉駅より快速線に乗車しておよそ一時間を要した。外房上総の春とはいえ、凜とした早春の朝の張り詰めた空気が辺り一面に漂っていた。今年の東京近辺の寒さはことの他厳しい。名みみの春に痺れを切らし本日の春を迎えに来た一行にとってまさに吟行日和の一日でもあった。

一宮町長の馬淵昌也氏の案内で一宮町の逍遙が始まった。温暖な気候に恵まれた当地には縄文・弥生時代より人々の営みがあった。一宮町は門前町として知られる。町全体は清潔感に溢れ落ち着いた雰囲気一面に漂っていた。まず玉依姫命を祭る玉前神社に参拝した。平安時代に建立、菊の御紋章を頂く靈験あらたかなる神社で釣ヶ崎海岸に参集する裸祭が催される九月十三日には町は大いに賑わう。

静まり返る神社の境内にてしばし句作に耽る。一行は観明寺に到着、町内最古の四脚門が参道に立つ。手入れのゆき届いた広い境内には探し求めている春が来ていた。梅が咲き誇り、彼岸桜の花が綻ぶ。冬木の芽が待ちに待った春の到来を一齐に喜び合っていた。寺の極楽地獄欄間図の彫刻が印象的であった。食事の後、十三時から始まった句会は十六時に閉会。房総の句友との句会は大変有意義であった。

二〇二〇年のオリンピックのサーフィン会場に決定、世界の人々もきつと一宮町を堪能すること請け合いです。 (長井 寛記)

【入賞者作品】(二句のうち一句)

- ① 鐘鳴りて沖に淋しき鯨たち 越野 雄治
- ② 観音のまぶたの裏も梅咲いて 木之下みゆき
- ③ 鐘の音の及ぶ限りや里の春 馬淵 昌也
- ④ 薄氷のかたちになつてゆく晩年 長井 寛
- ⑤ 木と話す老人とある春隣 上野 紫泉
- ⑥ 子授けイチョウ枯れているほととす 細野 一敏
- ⑦ 坊さまの話長々風邪心地 加藤 法子
- ⑧ 白水仙木口昭和の町屋かな 矢野 忠男
- ⑨ 大槓の秀に神遊ぶ寒日和 星野 一恵
- ⑩ 絨毯は海の青いる観明寺 山崎 幸子
- ⑪ 梅一輪人より高く結ぶ籤 東 國人
- ⑫ 初梅の城址黒船をいまも待ち 池田 博臣
- ⑬ 遠くに海ここに地獄の凍るかな 小林 実
- ⑭ いぬ槓の幹のうねりや日脚伸ぶ 鈴木まんぼう
- ⑮ さざれ石玉さき本殿冴え返る 佐藤 貞子

【特別選者特選句】

- (秋尾 敏会長 特選)
 鐘鳴りて沖に淋しき鯨たち 越野 雄治



句会風景



秋尾会長と上位入賞者(左より敬称略)
 秋尾会長、木之下みゆき
 越野雄治、馬淵昌也町長

- (馬淵昌也一宮町長 特選)
 いぬ槓の幹のうねりや日脚伸ぶ 鈴木まんぼう
- (並木邑人副会長 特選)
 木と話す老人とある春隣 上野 紫泉
- (榎垣梧樓副会長 特選)
 臥龍とて期することあり寝正月 馬淵 昌也
- 【その他作品】(二句のうち一句・受付順)
 赤すぎはせぬか参道の落椿 徳吉洋二郎
 千年をひと飛び寒のサーフィンす 並木 邑人
 挽回のチャンス上総の雪を踏む 秋尾 敏
 一月の上総とんびの直下にて 榎垣 梧樓
 いにしえをいまに伝えし雪やしろ 藤野 国彦
 城跡や戦士の雄叫び百舌の声 藤野 幸恵
 地獄絵にふるえる庭には梅の花 吉田百合子
 蔵の扉開け放たれし初句会 佐藤美紀江
 一の宮町長宅の紅椿 高橋 宗史
 一の宮「天地人」皆四方の春 内田 正成
 産みの海見上ぐる城址は守りの森 政成 一行
 観明寺の鐘ついてくる初吟行 増田 豊子
 春隣地獄極楽暗がりに 大澤ひろみ
 流れつく仏の顔は問はぬ梅 徳田 悠子

図書紹介

■句集『カフカの城』 川嶋 悦子

平成二十九年十一月二十二日刊 紅書房

花月夜小さく振って鈴を買う

冬の霧カフカの城へ行く道か

悦ちゃんに戻る林檎を囁りいて

■句集『文月の舟』 鈴木 瑩子

平成二十九年十月三十日刊 白灯書房

座布団のわずかなへこみ冬に入る

母の日やLP盤に針おとす

八月の涙はあおく青のまま

■句集『壺の耳』 山口 彩子

平成三十年一月二十五日刊 角川文化振興財団

遣されし指輪のくもり濃あじさい

どっと来る記憶八月のかくれんぼ

もうすこしこちらにいます花筏

ひろば

■現代俳句協会七十周年式典開催

平成二十九年十一月二十三日、帝国ホテル

で開催された式典において当協会顧問の山崎

聰氏、三苦知夫氏が功労賞を受賞されました。

おめでとうございます。

(詳細は「現代俳句」一月号、二月号に掲載)

【特別功労者】 山崎 聰

【地区功労者】 三苦 知夫

■市原市文化祭俳句大会

平成二十九年十一月五日、秋尾敏会長を主

選者に招き、市原市文化祭俳句大会を開催し

た。大会には県内外から五一〇句、高中生に

よる第九回文芸コンクールでは市内十二校か

ら八六一句と過去最高の応募があり、当日の

席題句会は四十九人が出席して実施した。

(並木邑人記)

☆事前投句の部

市原市長賞

黙祷の小脇に挟む夏帽子

市原市俳句協会賞

蜘蛛の囀の居留守を使うこと上手

市議会議長賞

鮫鯨のふてぶてしさに値札付く

教育長賞

鍵穴に合ふ鍵ひとつ良夜かな

文化祭実行委員長賞

残されし農具そのまま罫雲

☆文芸コンクール／俳句の部

市原市長賞

影伸びてひぐらしの鳴く帰り道 長谷川駿一

市原市長賞

思ひ出す稲の香りと祖父の顔 上村 菜緒

市原市俳句協会賞 三和中3年

炎昼の空まで響く応援歌 村越 柚奈

市原市俳句協会賞 市原緑高2年

せせらぎの音に混じりて蛍飛ぶ 藤田 梨香

■第三十八回四街道市民文化祭俳句大会

日時 平成二十九年十一月十二日

会場 四街道市文化センター

源流主宰賞

茜雲帰り遅れし寒鴉

四街道市長賞

しがらみを断つこと外す蕪かずら

議長賞

生業を誇る十指や秋収め

教育長賞

花野きて心の重石を置きにけり

農業協同組合長賞

木枯やビルの谷間にさ迷へり

商工会長賞

秋灯や開きし本に時代を読む

第七位

翳されし核に戦く案山子かな

第八位

凧が持ち去り持ち込む世の情

第九位

古里へ無垢の泣の天の川

第十位

若者の孤独弾けるハロウィーン

稲垣 武雄 (小出治重記)

置鮎 隆一

土肥 勲

望月 麗子

浅見美代子

下田 力

海老沼季衣

西村 峰子

山崎 弘美

池田 幸

幸

◆春の吟行会◆

日時 平成三十年四月二十九日(日・祝日)

場所 千葉市動物公園

句会場 千葉市生涯学習センター

*問合せ先ほか、詳細は折り込みのチラシをご覧ください。

■第三回千葉俳句大賞

二月十一日、千葉市ホテルプラザ菜の花に於て贈賞式が開催され、当協会幹事の清水伶氏が千葉俳句大賞準賞を受賞されました。おめでとうございます。

千葉俳句大賞

下鉢 清子 句集『貝母亭記五百句』ウエツブ

千葉俳句大賞 準賞

清水 伶 句集『星狩』 本阿弥書店

千葉俳句大賞 奨励賞

荻原透葉子 句集『初暦』 文學の森

《会員・会友の近況》

・ 鴨川市にある県立長狭高校、定時制で国語と書道を担当しています。午後一時から九時三十分までの勤務です。四年経つてようやくこの生活にも慣れてきました。俳句は細々と自分なりに自然体で作句しています。

(東 國人)

・ 大正生まれで今はやつと句を作り楽しんで居ります。句材もとぼしく皆様にお目通し頂くのが恥かしいのですが。(伊東 靖子)
・ 過日、長谷川權氏の講演を聴く機会がありました。知的な構成の講演で、大変分かり易い内容でした。(池田 和人)

・ 先日、高齢者認知機能運転講習を受講してきました。記憶力、判断力、集中力の低下を身をもって実感しました。(山中とみ子)

・ 五泊六日のショートクルーズに参加しました。日本全国、そして外国人もいっしょの船旅でした。旅行会社の企画で句会を開き、いろいろ情報交換をし楽しい船旅でした。地平線上に沈む大きな大きな夕日に歓声しきりでした。(山中 頼子)

・ 昨年中学校の同窓会で唐津へ、五年振りの再会。前回は百人位でしたが、今回は四十八名、年齢を感じこれが最後かなあと、思い、帰路に着きました。(岩岡 方子)

・ 友人の油絵個展の搬入を手伝いました。額装され飾付された絵は見違えるほど素晴らしくなりました。「額に入ると絵も佳くならうとするのだろう」と画家。俳句には縁はありませんよ。(吉岡 一三)

・ ガン世代の真ん中で俳句を楽しむことに努めたいと思うこのごろです。(岩佐 久)

・ 房総に移り住んで十四年目になります。里山・里海を求め、花活けの旅を続けています。猿に鹿にキョン、目の前を成獣の猪がはしります。(北野 耕兵)

・ 終活をじっくり味わい、人生まっとうへと挑戦！です。(加納ひでこ)
・ 間もなく九十四歳。大正女と年歳との交戦中。(加倉井允子)

・ 津田沼駅の近くで一年程前から五、六人で句会を始めています。(蛭名 節昌)
・ 厳しい寒さのこの頃、空気澄んだ朝など近くの江戸川土手に行くとき真白な雪の富士が眺められます。又、筑波山としてスカイツリーも見られます。途中の家々には寒椿、臘梅も咲き、句材を求めて散歩をします。

(興津 恭子)

・ 自分でもびっくりする位高齢になってまだ何処へでも遊びに行きます。外出することが元気の元なのかとも思っています。娘二人はつかず離れず私を自由にしてくれまのでありがたいです。(岡田 淑子)

・ 退職を機に始めた俳句ですが、八年を過ぎようとしています。結社の同人として今年五年目に入ります。週三日の電車出勤の中が作句の時間です。多作多捨をモットーにしています。(大澤 重市)

・ 最晩年生き残りのような日々の作品。只このころの有り様を書きつづる。老化は隠し得ないが、生きざまを私の作品に私を組立てているようでもあり、残りの人生を私が注目しながら……。(菊地 京子)

・ 傘寿を迎えることが出来ました。この頃は医者通いも多くなりましたが、好きな俳句を私なりに作っています。(川又 優)

・ 一月一日息子二人の家族九人、近くの八幡様に初詣。正月料理で祝い、その後恒例のボーリング大会をする。孫達といつまで続けられるかな！(小川トシ子)

・ 毎月一回の青葉句会。いつも通りの二次会が何よりのたのしみ。先輩方の豊富な話術に句会の苦さを忘れまます。(加藤 法子)

・ 句会に卒寿の方が通つて来られ、前向の姿勢に自分の俳句に対する不勉強を反省しています。(岡山 敦子)

・ 句作を始めて十余年、少しは進歩しているかなとも思いますが、もっと感性を磨かなければと反省しきりのこの頃です。(大坂 吉也)

■総会・俳句大会のお知らせ

既にお知らせの通り

三月十八日(日)に定期総会・俳句大会が千葉市文化センターにおいて開催されます。

定期総会 十時半開会

俳句大会 十三時開催(席題発表は十時)

是非ご参加下さい。

新会員・会友紹介

八街市八街に 菱木 良一(会員)

(推薦者 水野二三夫)

芽起こしを促す音の雨水かな
古刹には青衣を脱ぐ大蛇あり
早梅の蕾に見える兆しかな

船橋市飯山満町 玉山 政美(会員)

(推薦者 秋尾 敏)

いにしえの水を湛えて月は夢
冬林檎果肉は紅くないリアル
母の背の青い鱗に触れ臍

掲示板

《会員・会友異動》

●逝去 (会員) 松下總一郎

●入会 (会員) 佐藤直子、島 隆史、
森井美恵子

●退会 (会員)

内海康男、大木黄秋、
白鳥可桜、吉田勢津子、
清宮迷走子、中條雅夫、

●俳名変更

(会員) たけなか華那(旧俳名竹中華那)

根岸ナツ、星たかゑ、
堀部映子、村上千代美、
森 美樹、山崎芳子、
野崎春女、太田まさ子、
小高 稔

《平成二十九年第四回幹事会》

日時 平成二十九年十一月二十八日(火)
午後四時三十分より

場所 三井ガーデンホテル千葉

議題

- 一、平成三十年度俳句大会・作品募集について
- 二、第一二七号会報について
- 三、秋の吟行会の報告
- 四、平成三十年度ミニ吟行会について
- 五、平成三十年度春の吟行会について
- 六、現代俳句協会(本部)の動向について
七十周年記念全国大会ほか
- 七、神奈川県三十五周年記念俳句大会報告
- 八、各研究会の状況について
- 九、その他 ①会員・会友の入退会状況
②次回幹事会
③平成三十年度総会・俳句大会

《平成三十年度第一回幹事会》

日時 平成三十年一月二十三日(火)
午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、平成三十年度総会資料について
- 二、俳句大会の応募状況について
- 三、第一二八号会報について

- 四、ミニ吟行会について
- 五、平成三十年度春の吟行会について
- 六、現代俳句協会(本部)の動向について
- 七、その他 ①会員・会友の入退会状況
②次回幹事会その他

□□事務局・編集部だより□□

●千葉県現代俳句協会規約に『総会は本会の最高議決機関』とあります。当日になっての出席も可能です。参加されて席題の俳句大会共にご活躍くださるようお願いいたします。「私の感銘句」七十名の方から投稿頂き、有り難うございました。到着順に掲載させて頂きます。

●「諸家近詠」は名簿の順に一年半に一回のペースで投稿をお願いしております。こちらもご協力宜しくお願いいたします。

現代俳句千葉 第一二八号

平成三十年三月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 秋尾 敏

現代俳句千葉編集部

〒261-0004 千葉市美浜区高洲
三十五-六-一六〇二

徳吉洋二郎

千葉県現代俳句協会事務局

〒278-0043 野田市清水五二七-一〇
高橋 宗史

TEL・FAX 〇四一七一二五-一三三八二